

偶 見

八 田 弘

おおかたの野鳥が繁殖期にさえずるのに比し、ひっそりと育雛をし、秋も深まつた朝靄の中でけたたましくさえずる風変わりもののモズ、電線や梢でひょうきんに尾を振る姿が人々の関心を呼びおこす秋のモズ、小形ながらも猛禽の仲間入りをしており、モズのハヤニエといわれるカエルやミミズの干物は食料貯蔵の目的ではなく、単なる本能的な行為だそうだが、小形ながらも猛禽としての行動を1月の雪の中で目撃した。

武生の市街地である東小学校の校庭へはいった午後3時ごろ、10cmほどの積雪の中から、鳥の声だけあるが、なにの鳥と判別できない名状しがたい驚怖の叫び声が聞こえてきたので、注意をこらすと、3mほど離れた雪の上で、それもしばらく見つめてようやく判別できたのだが、スズメにモズがもつれ合っていた。スズメは羽根を広げてバタつかせて腹をみせており、モズが攻撃を加えているのであった。どれほど前から闘争が続けられていたのか、もうスズメは断末魔の状態であったので助けるのも無駄と、自然のなりゆきにまかせて、観察することにした。

モズは精かんそのものといった姿勢でスズメの周囲をとびまわっては攻撃を加え、発見してから50秒で（時計を見た）声も立てず動きも止めてしまった。この大きな収穫をどうするかと見守ったが、じつて見守つて動かないこと2分、それも4mほどの所に人間がいるのに、彼も獲物をしとめるには命がけであると感じられた。最後を見とどけたいと思ったが、会議出席を急いでその場を去った。2時間経た帰りには、その辺に羽毛が散らばっているだけで、スズメの姿は見られなかつた。

人類に大きな恩恵を与えていたる野鳥は、文化の開発という人災によって帰滅の途をたどつてゐるが、先きに述べたような弱肉強食や天災によるハイ死も数多く挙げられる。過去の経験をまとめると資料は不十分だが、40年4月から41年3月までに、北日野小学校および第3中学校の児童生徒によつて届けられた被害鳥について述べてみると

メスキジ（40.5.17） 北日野小前のアゼで犬が食べようとしていたもの。届けられた時は体温はあつたが、臨終状態でまもなく落命。外傷があつたが、元気な状態であつた。抱卵中をおそわれたか、調子が悪いところをおそわれたかは不明だが、解剖の結果卵殻を持つ卵があり、胃の内容物も果実種子や甲虫の幼虫があつて元気であつたことを示していた。

38.1の豪雪以来ほとんど姿を見なくなつたキジと思うと特に惜しい気がする。

チユウサギ（40.5.27） 武生市瓜生町に広がる竹やぶけ、野鳥勢力の盛衰がよくうかがえ

る。10年ほど前までは秋の渡り鳥ニュウナイスズメが10万羽近くもねぐらとし、大舉して乳熟期の糞の汁を吸いつくし、大きな被害を与えた。爆竹の音が盛んであったのが止んだ次にはずんぐりむつくりのムクドリの大群のねぐらとなり、近年はコサギ・チュウサギゴイサギ・アマサギ・ササゴイの営巣地となり、繁殖期には数千の群舞が見られる。方々の森林で営巣が見られたのが、今はここに限られるようになり、ニュウナイスズメやムクドリが少なくなったのも何からなづけるものがある。さてこのサギであるが、手の届きそうな竹の枝から上に、数段にわたって下から卵の見えるよう粗末な巣で、親がよくも間違わないと思われるようなくぎやかさである。だから割れたのや無キズの卵が無数に落ちており親にみけなされた幼鳥に、アリやシデムシが腐肉に群れていたり、成鳥のヘイ死も数羽みられ、自然淘汰の理を目のあたりみる。

トビ(40.10.7) 北日野小に届けられたもので躊躇に負傷、これは校長先生を中心として児童や先生方のお骨折りで無事全快して無事故鳥される。ありがたいことであった。

メスキジ(40.10.4) 西谷町からヘイ死鳥として届く。外傷らしい様子は見られなかつたが、剥製に解剖してみると、胸の背骨が縦に包丁で切ったようにひきさかれていた。皮膚をみると、背面左側にアズキ粒ほどのない大小6個の穴があいていただけであった。

野獵退治のペテラン、フクロウのするどい爪のギセイだろうか。

トビ(40.2.3) 学校に届けられた時は息をしており、水も喰み、チクワも食べたが、体は倒れたままであつて、数時間で死んでしまつた。剥製にしてみると、やせこけしており、嘴の先きもすりへついて、老令の衰弱かと思われた。さらに左翼の尺骨には段々になつたこぶの骨が数段ついていたので、大型鳥の羽軸を十分固定させるしくみと感心したが、右翼には他の鳥と同じようにこんなことがなかつたので、よく調べてみると、骨折の治療した跡であつた。精悍にみせるため、開翼の標本とする。

アオサギ(41.2.7) 小野谷町から届く。家の前に死んでいたもの。特に障礙があつたようすけなかつた。

ミソサザイ(41.2.18) ヘイ死鳥として届く。野鳥のなかでの最小形、フォルマリン注射と眼球けめこみだけの標本とする。

ヒクイナ(40.10.21) 3中のブロックつい際でヘイ死。今朝はよく晴れて冷えこみも強かつた。南へ渡りおくれたのが、寒さのためにやられからしい。まだ硬直状態で羽毛も整つており、立派な剥製ができた。

剥製を覚えてから手にけいつたヘイ死鳥の剥製はキジ(オスメス)、ヤマドリ(オス)・オシ

ドリ(メス)・カワアイサ・カケス・コサギ・チュウサギ・アオサギ・ゴイサギ・ササゴイ・コノハズク・フクロウ・アカショウビン・ヒヨドリ・シロハラ・ツバメ・スズメ・セグロセキレイ・ミソサザイ・ミサゴ・ツミ・アカゲラ・ヒクイナの23種34個体で、私1人のことから考えてみると、その数の多いことが伺える。

植物について珍しく貴重と思ったのは、水落町の国道から少し西にはいった赤土の埋立地のナンバンギセルの群落と、鬼岳西麓のトキソウ・サギソウの自生と、平吹町日野神社でコハナヤスリを採集したのが県下で3番目であつたそうで、その後日野山頂と水落町の忠靈塔付近で採集した。

貧弱だが、わたしが経験したことの1部を報告しておく。